

# 相互行為の参加者はどのように発話のトラブルに対処するか —接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着目して—

雷 雲 恵

## Conversational Repair Strategies:

Focus on the Use of Self-repair by Native Japanese Speakers

LEI, Yunhui

本文以在无日语教学经验的日语母语者（以下简称NS）与非日语母语者（以下简称NNS）的接触场面中NS使用的“自我修复”为考察对象，通过对比分析日常与NNS接触经验不同的NS在对上级NNS场面和对初中级NNS场面中，“自我修复”的使用次数、方法以及在修复连锁中使用的异同，阐明NS的接触经验和NNS的日语能力对NS“自我修复”的使用产生的影响。

结果如下：首先，接触经验多的NS比接触经验少的NS“自我修复”使用次数更多，特别是在对初中级场面中频繁使用。其次，修复方法也更多，在对上级场面中，重组程度高的“自我修复”较预期使用更多，在对初中级场面中，重组程度低的“自我修复”使用更多。接触经验多的NS在“自我修复”时，会根据NNS的日语能力进行调整。另一方面，接触经验少的NS的“自我修复”使用次数和方法都较少，且在“自我修复”时未能根据NNS的日语能力进行调整。此外，通过观察NS的“自我修复”连锁发现，接触经验多的NS会多次使用各类“自我修复”方法直到得到NNS的理解为止。而在接触经验少的NS的连锁中出现了未得到初中级NNS的理解就放弃修复转向下一个话题的情况。综上所述，在接触场面中，随着NS接触经验的增多，NS能够更好更有效地根据NNS的日语能力进行“自我修复”。

关键词：接触场面，Foreigner Talk，自我修复，接触经验，日语能力

## 1. はじめに

近年、日本においては定住外国人の数が増えており、国籍などの異なる人々が地域社会の構成員として共に生きていくために多文化共生社会を構築する必要性が増している。2006年に総務省が、外国人に対する支援を整備するための「地域における多文化共生推進プラン」を策定して以降、各地域においては、多文化共生社会の実現に向けて、生活・災害情報伝達やコミュニケーション支援など様々な支援<sup>1</sup>が行われてきた。しかし、それらの支援は一部の日本語教師によるもので、日本語教育経験のない一般の日本語母語話者（以下ではNS）による支援はまだ十分行われているとは言えない。身近な外国人とのコミュニケーションに困難を抱える一般のNSが直面する問題は軽視できない。

2人以上の対面会話においては、互いに、言い間違えたり適切な表現が思い出せなかったり発話が聞き取れなかったりして、さまざまなトラブルがしばしば起こる。それらの発話のトラブルが生じた場合、会話参加者は、円滑な会話進行の流れを妨げなければ、発話のトラブルを明示せずに会話を続けることもあれば、トラブルの存在を意識して、何らかの解決案を志向してトラブルに対処することもある。そのような発話の産出、聞き取り、理解にかかわるトラブルに対処する時に現れる一連の手続きは「修復 (repair)」と呼ばれる (シェグロフ他 2010)。会話における「修復」という現象については、通常、「自己修復」と「他者修復」に区別され、「自己修復」とは、トラブルの発話の話し手本人が修復を行うことであり、「他者修復」とは、話し手以外の者によって修復が行

1 文化庁 (2016) の「地域における日本語教育の推進に向けて：地域における日本語教育の実施体制及び日本語教育に関する調査の共通利用項目について」(閲覧日：2020/11/10、[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/hokoku\\_160229.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/hokoku_160229.pdf)) や、日本放送協会 (NHK) のやさしい日本語で書いたニュース (閲覧日：2020/11/10、<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>) などが挙げられる。

われることである。その中で、「自己修復」は規範的に優先されるという経験的な偏り<sup>2</sup>があることが指摘されている（シュグロフ他 2010）。つまり、一般的な会話において会話参与者は発話のトラブルに対処する際に、「他者修復」よりも「自己修復」のほうが圧倒的に多い傾向があると言える。

NSと日本語非母語話者（以下ではNNS）が日本語を用いてコミュニケーションを取る接触場面では、母語場面より発話のトラブルが多く発生すると思われ、発話のトラブルに対処するために優先的に行われる「自己修復」がより頻繁に起こると考えられる。大平（1999）は、接触場面におけるNSが行う「自己修復」をNNSの理解を促進するための手段として挙げている。接触場面において日本語力が十分ではない相手と相互理解を図りつつコミュニケーションを遂行するためには、NSが行う「自己修復」は大きく貢献すると考えられる。

そこで、本稿では、接触場面における日本語教育経験のない一般のNSが行う「自己修復」に注目して、NSはどのように「自己修復」を行って発話のトラブルに対処するか、解明することを目指す。

## 2. 先行研究と研究課題

### 2-1 先行研究のまとめ

接触場面においてNSが自らの発話を様々な形で調整するコミュニケーション・ストラテジーは従来、「フォリナー・トーク」という枠組

---

<sup>2</sup> 修復開始の多くは、まず最初に「自己修復」を導く。それは「他者修復」の出現を制限する様々な制約があるためである。サックス他（2010）は、会話において順番交替組織が働いているとし、その順番交替組織は、現在の話し手が、とにかく現在の順番の完了可能な場所（移行適切場所（transition relevance place：TRP））まで、話し続ける権利を保証するものである。「他者修復」は、修復開始のために現在の話し手の発話順番に割り込む必要があるため、非優先的なものとなる。シュグロフ他（2010）は、「他者修復」がまれであるのは、順番交替組織の帰結であると記述している。

みの中で研究がなされてきた。日本語におけるフォリナー・トーク研究の最初の試みであるスクータリデス（1981）は、「語・節の繰り返し」「他言語の言い換え」や「訂正」などのNSが行う「自己修復」の手段を日本語のフォリナー・トークの特徴として挙げている。それ以後、NSが行う「自己修復」は日本語のフォリナー・トークの特徴として捉えられてきたが、接触場面においてNSが行う「自己修復」の使用実態と修復過程については詳しく検討されていない。

接触場面におけるNSの「自己修復」に注目する先行研究として、志村（1989）、大平（1999）が挙げられる。志村（1989）は、母語場面と接触場面における二者間自由会話を対象として、NSの修正に注目して分析した結果、母語場面と比べて接触場面は、文レベルの修正も談話レベルの修正も多いことがわかった。また、大平（1999）は、接触場面におけるNSの「言い直し」<sup>3</sup>に注目し、NSがNNSを対象にインタビューを行った際の談話を収集して分析した。NSの「言い直し」の成功率を分析した結果、「言い直し」の方法によって成功率が異なることを示した。ここでは、NSの発話調整能力に影響を与える要因としてNNSとの接触経験が挙げられていることが注目される。

一方、接触場面におけるNSの発話調整能力にNNSとの接触経験が与える影響について詳しく検討したものとして、増井（2005）、筒井（2008）、柳田（2010）がある。増井（2005）は、一般のNSがNNSに絵の内容を説明し、NNSが同じ絵の説明を再生するというタスクを各組5回実施した。1回目の会話と5回目の会話を比較した結果、5回目の会話ではNSによる修復的言語調整の頻度も種類も多くなる傾向が見られた。筒井（2008）は、日本語教師・ホストファミリー・一般のNS

3 先行研究における「言い直し」という表現は、本稿の「自己修復」と同じことを指す。

を対象として、公的文書をNNSに説明するロールプレイ調査を実施した。その結果、日本語教師及びホストファミリーは、一般のNSに比べて、発話の情報の加工の度合いが高いことが分かった。また、柳田（2010）は、日本語教育経験のない一般のNSに注目し、接触経験の多いNSと接触経験の少ないNSを調査対象として、それぞれ中上級NNSにインフォメーション・ギャップ・タスクを行った。その結果、接触経験の多寡がNSの自己発話の修正の方法に及ぼす影響は少ないが、接触経験の多いNSは自発的に発話修正を行うことが分かった。以上のことから、接触場面における一般のNSが行う「自己修復」には、NNSとの日常的な接触経験の多寡が何らかの影響を与えていると考えられる。しかし、以上の先行研究は、NSの発話調整に注目しているため、NSの属性は考慮しているが、もう一方の会話参与者であるNNSの属性が及ぼす影響については十分に検討されているとは言えない。

日本語のフォリナー・トークに対するNNSの好感度を調べた坂本他（1989）は、NNSは言語能力が上がるにつれてフォリナー・トークの好感度が低くなることを明らかにして、フォリナー・トークを、NNSの中間言語の発達に応じて変わっていく動的な体系として捉える必要があるとしている。このことから、接触場面においてNSが行う「自己修復」に関しては、会話参与者であるNNSの日本語能力との関連性も推測される。

## 2-2 研究課題

以上のことから、本稿では、接触場面において一般のNSが行う「自己修復」に、NSのNNSとの日常的な接触経験とNNSの日本語能力がどのような影響を及ぼしているかを研究課題として設定する。具体的には、「自己修復」の使用回数、方法、発話連鎖の三点を分析視点として、NS

のNNSとの日常的な接触経験とNNSの日本語能力がNSの「自己修復」に及ぼす影響について、分析し考察を行う。

### 3. 調査概要

#### 3-1 調査時期及び調査対象

本調査<sup>4</sup>は2018年4月から2019年7月にかけて行った。調査協力者の性別、年齢、親疎関係などの属性を統一し、調査対象は20代前半を中心とした女性の大学生及び大学院生とした。

NSは、接触経験の多いNS 4名（以下ではNSE1～NSE4）、接触経験の少ないNS 4名（以下ではNSN1～NSN4）の計8名で、NSのインフォーマント情報を表1に示す。「接触経験が多い」と判定したのは、普段から外国人と日本語で話す経験があり、その頻度が週に1回以上で毎回の発話量が十分にあり、さらに日本語で話す親しい外国人の友人が

表1. NSのインフォーマント情報

	性別	年齢	出身地	日本語教育 経験	外国人と日本語で 話す経験		日本語で 話す外国人 の親しい友達
					頻度	発話量	
NSE 1	女	20	群馬県	無	ほぼ毎日	たくさん	いる
NSE 2	女	20	埼玉県	無	週に1～2回	たくさん	いる
NSE 3	女	24	福島県	無	週に3～4回	たくさん	いる
NSE 4	女	20	埼玉県	無	週に1～2回	たくさん	いる
NSN 1	女	20	埼玉県	無	ほとんどなし	*	いない
NSN 2	女	21	埼玉県	無	ほとんどなし	*	いない
NSN 3	女	20	栃木県	無	ほとんどなし	*	いない
NSN 4	女	22	宮城県	無	ほとんどなし	*	いない

<sup>4</sup> この調査の実施とデータの収集については文教大学文学部・言語文化研究科研究倫理審査委員会の承認を得ている。

いるNSである。「接触経験が少ない」と判定したのは、外国人との日本語での会話経験がほとんどなく、日本語で話す親しい友人がいないNSである。

NNSは、上級NNS 8名（以下ではNNSA～NNSH）、初中級NNS 8名（以下ではNNSa～NNSh）の計16名で、NNSのインフォーマント情報を表2に示す。NNSの日本語能力は、学習歴、滞日歴、日本語能力試験の資格の3点から判定した。上級NNSと判定したのは、日本語学習時間が800時間以上で来日して2年以上の日本語能力試験N1合格者あるいはN1に相当する能力が認められるNNS<sup>5</sup>である。また、初中級NNSと判定したのは、来日して約1年、日本語学習時間が300時間から

表2. NNSのインフォーマント情報

		性別	年齢	国籍・地域	母語	日本語学習歴	日本滞在歴	日本語能力
上級 NNS	NNSA	女	26	中国	中国語	4年6ヶ月	3年	N1合格
	NNSB	女	24	中国	中国語	4年6ヶ月	3年7ヶ月	N1合格
	NNSC	女	26	中国	中国語	4年8ヶ月	2年9ヶ月	N1合格
	NNSD	女	22	マレーシア	マレー語	5年	4年3ヶ月	N2合格
	NNSE	女	22	中国	中国語	4年	2年6ヶ月	N1合格
	NNSF	女	25	中国	中国語	5年	3年1ヶ月	N1合格
	NNSG	女	25	中国	中国語	6年	3年2ヶ月	N1合格
	NNSH	女	32	中国	中国語	4年	5年3ヶ月	N1合格
初中級 NNS	NNSa	女	20	中国	中国語	3年1ヶ月	1年	N3合格
	NNSb	女	21	中国	中国語(広東語)	2年1ヶ月	1年6ヶ月	N3不合格
	NNSc	女	23	中国	モンゴル語	7ヶ月	2ヶ月	N3不合格
	NNSd	女	17	中国	中国語	2年6ヶ月	1年2ヶ月	N3合格
	NNSe	女	24	ベトナム	ベトナム語	10ヶ月	4ヶ月	N3不合格
	NNSf	女	21	台湾	中国語	1年2ヶ月	1年2ヶ月	N3合格
	NNSg	女	22	インドネシア	インドネシア語	3年1ヶ月	1ヶ月	N3合格
	NNSh	女	27	ドイツ	ドイツ語	2年6ヶ月	2ヶ月	未受験

<sup>5</sup> N1未受験である者(NNSD)については、授業を担当する日本語教員に判断してもらい、上級と判定した。

600時間で、日本語能力試験N3合格者あるいはN3に相当する能力が認められるNNS<sup>6</sup>である。

### 3-2 調査方法

本調査は、NSとNNSの初対面場面を設定し、ロールプレイ方式を採用した。ロールプレイの内容は、NNSが学校の休みを利用して日本観光をしたいと考え、日本人の友人NSに相談しながら最終的に二人で行先を決めるというものである。

調査は次の順番で行った。調査前に約10分間雑談してもらった後、調査者は、ロールカードと旅行パンフレットを2人に渡し、ロールプレイの内容と会話時間を説明して退室した。約10分間のロールプレイが終了した後、調査者が入室してそれぞれの調査協力者にフォローアップ・インタビューを行い、会話に対する理解度や評価を確認した。

接触経験の多いNS 4名と接触経験の少ないNS 4名に、それぞれ上級NNSと初中級NNSと2人1組でロールプレイを行ってもらい、接触経験の多いNSの対上級場面が4組、対初中級場面が4組、接触経験の少ないNSの対上級場面が4組、対初中級場面が4組、合計16組、約160分のロールプレイ会話を録音し、文字化して分析した。文字化の方法は宇佐美（2015）に従った。

## 4. 調査結果及び考察

### 4-1 「自己修復」の使用回数

まず、接触経験の多いNSと接触経験の少ないNSの、対上級場面と対

---

<sup>6</sup> N3不合格者（NNSb、NNSc、NNSe）とN3未受験である者（NNSh）については、それぞれの学習歴、滞日歴を確認したうえで、授業を担当する日本語教員に判断してもらい、初中級と判定した。



初中級場面の各談話におけるNSが行う「自己修復」の使用回数を集計した。その結果を表3に示す。

表3. NSの「自己修復」の使用回数 回 (%)

	接触経験の多いNS	接触経験の少ないNS
対上級場面	62 (32.1)	29 (39.7)
対初中級場面	131 (67.9)	44 (60.3)
合計	193 (100.0)	73 (100.0)

表3に示したように、全体から見ると、接触経験の多いNSは193回「自己修復」を行っており、接触経験の少ないNSの73回より約2.6倍多く用いていた。この結果について、マン・ホイットニーのU検定<sup>7</sup>を行った結果、両グループの間で「自己修復」の使用回数の中央値に有意差が見られ ( $U=3.000$ ,  $p<.05$ )、接触経験の多いNSが行う「自己修復」が有意に多いことが分かった。

また、場面別に接触経験の異なるNSの結果を見ると、接触経験の多いNSは、対上級場面では62回 (32.1%)、対初中級場面では131回 (67.9%) 使用しており、両場面についてマン・ホイットニーのU検定を行った結果、両場面の間で有意差が見られた ( $U=.000$ ,  $p<.05$ )。つまり、接触経験の多いNSは、上級NNSよりも初中級NNSに「自己修復」を有意に多く用いる傾向があるといえる。一方、接触経験の少ないNSは、対上級場面では29回 (39.7%)、対初中級場面では44回 (60.3%) 行っていた。両場面についてマン・ホイットニーのU検定を行ったところ、両場面の間で有意差は認められなかった ( $U=5.500$ ,  $n.s.$ )。つまり、接触経験の

<sup>7</sup> 母集団の正規分布を前提としないノンパラメトリック検定における対応のない2群の中央値の差の検定であり、パラメトリック検定におけるt検定に対応する。

少ないNSは、対上級場面でも対初中級場面でもほぼ同じ量の「自己修復」を行っていることが分かった。

以上の結果から、NSは普段からNNSと接触することによって、NNSの日本語能力に応じて発話のトラブルに対処することを身に付けていると考えられる。特に、対初中級場面では、発話のトラブルがより発生しやすいため、接触経験の多いNSは、初中級NNSが抱える問題点をより敏感に察知して、頻繁に「自己修復」を行って発話のトラブルに対処していることが推測される。一方、接触経験の少ないNSは、NNSの日本語能力に関わらず、ほぼ同じ量の「自己修復」を行っていることから、NNSの日本語能力に応じて発話のトラブルに対処することを身に付けていないと思われる。このことから、NSの接触経験は、NNSの日本語能力に応じた「自己修復」の使用回数に影響を及ぼしていると言えよう。

#### 4-2 「自己修復」の方法

大平(1999)では、NSの「言い直し」の方法を11種類に分類している。その分類に基づき、本談話資料に観察されたNSの「自己修復」の方法を①「繰り返し」②「関連語の言い換え」③「他言語の言い換え」④「詳述化」⑤「簡略化」⑥「一般化」⑦「パラフレーズ」⑧「文の構造変化」⑨「例示」の9種類に分類した。その結果が表4である。

表4. NSの「自己修復」の方法

回 (%)

	接触経験の多いNS		接触経験の少ないNS	
	対上級場面	対初中級場面	対上級場面	対初中級場面
①繰り返し	2 (3.1)	20 (15.3)	8 (27.6)	9 (20.5)
②関連語の言い換え	4 (7.8)	21 (16.0)	7 (24.1)	13 (29.5)
③他言語の言い換え	0 (0.0)	2 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
④詳述化	33 (53.1)	49 (37.4)	11 (37.9)	17 (38.6)
⑤簡略化	1 (1.6)	1 (0.8)	1 (3.4)	1 (2.3)
⑥一般化	1 (1.6)	1 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑦パラフレーズ	16 (25.0)	25 (19.1)	2 (6.9)	4 (9.1)
⑧文の構造変化	1 (1.6)	3 (2.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑨例示	4 (6.3)	9 (6.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	62 (100.0)	131 (100.0)	29 (100.0)	44 (100.0)

表4を見ると、接触経験の多いNSは、対上級場面では③「他言語の言い換え」以外すべて用いており、対初中級場面では①～⑨すべての種類の「自己修復」の方法を用いていた。それに対して、接触経験の少ないNSは、上級NNS、初中級NNSのどちらに対しても①「繰り返し」②「関連語の言い換え」④「詳述化」⑤「簡略化」⑦「パラフレーズ」の5種類の同じ「自己修復」の方法を用いていることが分かった。以上のことから、接触経験の多いNSが用いる「自己修復」の方法は、接触経験の少ないNSよりバリエーションが多いと言える。

さらに、柳田（2010）は、語彙や構成などの情報の再構成の程度によってNSの自己発話の修正を高・中・低に分けられるとしている。①「繰り返し」②「関連語の言い換え」③「他言語の言い換え」は、前述した発話を繰り返したり、語彙レベルで言い換えたりするものであり、発話の情報を再構成するためにNSにかかる処理労力が比較的低い。一方、④「詳述化」⑤「簡略化」⑥「一般化」⑦「パラフレーズ」⑧「文

の構造変化」⑨「例示」は、文レベルや談話展開に関わる情報処理であるため、再構成の程度はより高いと思われる。そこで、本稿では、①②③を再構成度の低い「自己修復」、④⑤⑥⑦⑧⑨を再構成度の高い「自己修復」として、「自己修復」の方法を情報の再構成度別に分類した。その結果が表5である。

表5. 情報の再構成度によるNSの「自己修復」回 (%)

	接触経験の多いNS		接触経験の少ないNS	
	対上級場面	対初中級場面	対上級場面	対初中級場面
再構成度の低い「自己修復」	6 (9.7)	43 (32.8)	15 (51.7)	22 (50.0)
再構成度の高い「自己修復」	56 (90.3)	88 (67.2)	14 (48.3)	22 (50.0)
合計	62 (100.0)	131 (100.0)	29 (100.0)	44 (100.0)

表5から、接触経験の多いNSは、対上級場面では再構成度の低い「自己修復」が6回 (9.7%)、再構成度の高い「自己修復」が56回 (90.3%)であるのに対して、対初中級場面では再構成度の低い「自己修復」が43回 (32.8%)、再構成度の高い「自己修復」が88回 (67.2%)である。接触経験の多いNSの両場面についてカイ二乗検定を行った結果、両場面と再構成度の異なる「自己修復」には有意な関係が見られた ( $\chi^2(1) = 11.903, p < .01$ )。さらに、残差分析を行った結果、接触経験の多いNSは、対上級場面では再構成度の高い「自己修復」を期待度数より多く、対初中級場面では再構成度の低い「自己修復」を期待度数より多く用いる傾向があることが示された。

一方、接触経験の少ないNSは、対上級場面では再構成度の低い「自己修復」が15回 (51.7%)、再構成度の高い「自己修復」が14回 (48.3%)

であるのに対して、対初中級場面では再構成度の低い「自己修復」が22回（50.0%）、再構成度の高い「自己修復」が22回（50.0%）である。さらに、両場面についてカイ二乗検定を行った結果、両場面と再構成度の異なる「自己修復」には有意な関係が見られず（ $\chi^2(1) = .112, n.s.$ ）、接触経験の少ないNSは、対上級場面でも対初中級場面でも、再構成度の異なる「自己修復」を区別なく用いていることが分かった。

以上の結果から、NSは普段NNSと接触することによって、NNSの日本語能力に応じて「自己修復」の方法を選択し、能動的に接触場面における発話のトラブルに対処することを身に付けていると考えられる。初中級NNSは上級NNSより日本語の理解語彙も使用語彙も量が小さいと思われるため、NSが「自己修復」を行う際に、初中級NNSには、修復に用いる1つ1つの語彙の理解を確認しながら修復を行う必要があるが、上級NNSには、語彙の理解を1つずつ確認しなくても、直接文レベルや談話展開に関わる修復に進むことが多いと推測される。接触経験の多いNSは、対初中級場面で語彙レベルの再構成度の低い「自己修復」、対上級場面で文や談話展開に関わる再構成度の高い「自己修復」が期待度数より多いことから、接触経験の多いNSは、NNSの日本語能力に合わせた「自己修復」の方法を選択し、修復を行っていると言える。一方、接触経験の少ないNSは、対上級場面でも対初中級場面でも、種類・再構成度の異なる「自己修復」を区別なく用いていることから、NNSの日本語能力に応じて「自己修復」の方法を選択して修復を行うことを身に付けていないと思われる。以上のことから、NSの接触経験は、NNSの日本語能力に応じた「自己修復」の方法に影響を及ぼしていると言えよう。

### 4-3 「自己修復」の発話連鎖

#### 4-3-1 「自己修復」の発話連鎖とは

シェグロフ他(2010)は、「自己修復」の修復対象となる発話部分を「トラブル源(repairable)」とし、修復の過程では、「修復を遂行もしくは成し遂げる者は、必ずしも修復活動を開始した者とは限らない」(p.166)と指摘している。その上で串田他(2017)は、修復の過程は、「修復開始」の段階と「修復実行」の段階に区別できるとしている。まず、「修復開始」の段階では、「トラブル源」が発生し、会話参加者が「トラブル源」の存在を明示し、修復を開始することによって、それまでの会話の進行が中断され、「トラブル源」を解決するプロセスが始まる。次に、「修復実行」の段階では、会話参加者は、何らかの修復方法によって「トラブル源」の解決を試み、その試みの成功あるいは失敗が明示され、修復開始前の会話が再開される。本稿では、「修復開始」の段階において「トラブル源」の存在を明示し、「トラブル源」の発話が「修復が必要なもの」として認知されるための発話部分を「修復開始要素」、「修復実行」の段階においてトラブル解決の試みの成功あるいは失敗を明示するための発話部分を「修復完了要素」と呼ぶことにする。

このように、本稿では、NSの発話において「トラブル源」が発生し、それに対する「修復開始要素」が生じたあと、NSが行う「自己修復」によって「トラブル源」が解決、または失敗するまでの一連の発話を、一つの「自己修復」の発話連鎖とみなした。以下では発話例を示し、「自己修復」の発話連鎖について説明する。

#### 例1 (東京ディズニーランドとディズニーシーの違いについて)

160-1 NSN1 そうだね、ランドだと、

161 NNSB うん

→160-2 NSN1 なんか、子供連れ、なんかー、親子連れが結構多いんですよ。

➡「トラブル源」「修復開始要素」「自己修復」

→162 NNSB ああ。 ➡「修復完了要素」

163 NSN1 なんかそういうアトラクションもあるんで…。

例1では、接触経験の少ないNSN1と上級NNSBが東京ディズニーランドとディズニーシーの違いについて話している。NSN1は160-2でディズニーランドの特徴として「子供連れ」を挙げた後、「なんかー」と言って直ちに同じ発話順番で「親子連れ」と言い換えている。ここの「トラブル源」は「子供連れ」であり、その後に生起する「なんかー」は「トラブル源」の存在を明示するための「修復開始要素」である。続いてNSN1は同じ発話順番で「親子連れ」と言い換えて「自己修復」を行っている。それに対してNNSBは162「ああ」と理解表明をしており、「トラブル源」が解決され、修復が完了したと言える。ここのNNSBの162「ああ」が「修復完了要素」であり、163からNSN1は新たな話題に転換している。このように、例1の160-2～162の断片は、NSが行う「自己修復」の1つの発話連鎖として捉えられる。

例2（瀬戸内海の特産物について）

→189 NSE3 オリーブわかりますか？。 ➡「トラブル源」

→190 NNSe オリーブ？。 ➡「修復開始要素」

→191 NSE3 olive、oっあのう、そういう油が取れる。  
➡「自己修復」

→192 NNSe ああ、油ですね、はい。 ➡「修復完了要素」

193 NSE3 レモンもおいしいですね。

例2では、接触経験の多いNSE3と初中級NNSeが瀬戸内海の特産物について話している。NSE3は189で「オリーブわかりますか?」と言った後に、NNSeに190「オリーブ?」と聞き返されている。ここでは、NSE3による189「オリーブ」が「トラブル源」であり、NNSeによる190「オリーブ?」が「トラブル源」の存在を明示するための「修復開始要素」である。続いてNSE3は191で、まず「olive」と英語で言い換え、さらに「そういう油が取れる」と説明を加えて、「自己修復」を行っている。NNSeに192「ああ、油ですね、はい」と理解表明がなされていることから、「トラブル源」が解決され、修復が完了したと言える。NNSeの192「ああ、油ですね、はい」は「修復完了要素」で、193からNSE3によって新たな話題が始まった。このように、例2の189～192の断片は、NSが行う「自己修復」の1つの発話連鎖として捉えられる。

以上のように、「自己修復」の発話連鎖には、「トラブル源」、「修復開始要素」、「自己修復」、「修復完了要素」という4つの部分があると考えられる。以下では、接触経験の異なるNSが行う「自己修復」の発話連鎖を観察し、考察を行う。

#### 4-3-2 接触経験の多いNSの「自己修復」の発話連鎖

まず、接触経験の多いNSと初中級NNSの発話連鎖を観察する。

例3 (浅草のお土産について)

10-1 NSE1 はい、これ、雷門、たぶん、ここが一番有名だと思うんだけど、

11 NNSa うん。

→10-2 NSE1 食べ物だと、人形焼が有名。



- 12 NNSa 人形焼？。
- 13 NSE1 人形焼っていう、うん、何と云えばいい、カステラ  
わかる？。
- 14 NNSa カステラ？。
- 15 NSE1 えっとね。
- 16 NNSa はい。
- 17 NSE1 お菓子なんだけど、中にあんこが入ってる II。
- 18 NNSa II あっ、えっ、甘いですか？。
- 19 NSE1 甘い甘い。
- 20 NNSa ああ、<日本> |<|。
- 21 NSE1 <どら焼きわかる？> |>|。
- 22 NNSa どい焼き？。
- 23 NSE1 どら焼き、あのう、ドラえもんわかる？。
- 24 NNSa ああ、ドラえもんわかり<ます> |<|。
- 25 NSE1 <ドラえもんが食べてる> |>|、[形を真似しながら]  
こういうー<お菓子が…> |<|。
- 26 NNSa <ああ> |>|、ああ。
- 27 NSE1 あれ、どら焼きっていうんだけど、あれみたいな感  
じのお菓子。
- 28 NNSa ああ。
- 29 NSE1 後は、東京、スカイツリー？。

例3では、接触経験の多いNSE1と初中級NNSaが浅草のお土産について話している。NSE1が10-2で挙げた「人形焼」が、NNSaに12「人形焼？」と聞き返されている。ここでは、NSE1の10-2「人形焼」が「トラブル源」で、NNSaの12「人形焼？」が「修復開始要素」である。

続いてNSE1はその「人形焼」を13「カステラわかる？」で「カステラ」と言い換えたが、NNSaが14で「カステラ？」とさらに聞き返したので、NSE1はNNSaが理解していないことを察知して17「お菓子なんだけど、中にあんこが入ってる」と「人形焼」の中身を説明している。「あんこ」が何か気づいたNNSaは、17の発話の途中で、18「あっ、えっ、甘いですか？」とNSE1に確認を求めている。NSE1は、NNSaが「あんこ」を理解していることに気付き、19「甘い甘い」と応じて「人形焼」の中身の理解を確認したあと、21で「どら焼きわかる？」と、今度は「人形焼」の外側について説明するために「どら焼き」を挙げています。それに対して、NNSaが22「どい焼き？」と聞き返したために、NSE1は23で「どら焼き」と修復して、さらに「あのう、ドラえもんわかる？」と言って、外国でも人気のある「ドラえもん」を持ち出している。それに対してNNSaが24「ああ、ドラえもんわかります」と理解を示したので、NSE1は25で手を使いながら「ドラえもんが食べてる、こういうーお菓子が」と説明を続けた。NNSaの26「ああ、ああ」というあいづちから、NNSaが「どら焼き」を理解したことが分かる。NSE1は27で「あれ、どら焼きっていうんだけど、あれみたいな感じのお菓子」と言って、NNSaが理解した「どら焼き」を用いて「人形焼」を説明し直し、そのあと、NNSaの28「ああ」という「修復完了要素」によって「人形焼」という「トラブル源」が解決され、修復が完了したことが分かる。29からNSE1によって新たな話題が始まった。

例3の10-2～28は、トラブル源の「人形焼」に関するNSE1の「自己修復」の発話連鎖である。NSE1が行う「自己修復」の方法のうち、13「カステラ」、21「どら焼き」、23「ドラえもん」は4-2節の②「関連語の言い換え」に属し、17「お菓子なんだけど、中にあんこが入ってる」、25「ドラえもんが食べてる、こういうーお菓子が」、27「あれ、ど

ら焼きっていうんだけど、あれみたいな感じのお菓子」は4-2節の⑦「パラフレーズ」に属し、23の「どら焼き」は4-2節の①「繰り返し」に属する。つまり、ここでは、①②⑦の「自己修復」が複数回使われていることが分かる。このように、接触経験の多いNSの発話連鎖は、NNSから複数の不理解表明や説明要求を受けても、NNSの理解反応を得るまで多種多様な「自己修復」を複数回用いて自己発話を修復している様子が窺えた。

#### 4-3-3 接触経験の少ないNSの「自己修復」の発話連鎖

次に、接触経験の少ないNSと初中級NNSとの発話連鎖を観察する。

例4 (沖縄のお土産について)

→102 NSN3 あと、ちんすこうってゆう砂糖菓子。

→103 NNSf 砂糖菓子?。

→104 NSN3 砂糖菓子。

→105 NNSf [沈黙1秒]。

106 NSN3 あとは、あとは、思いつかないなあ、あっパイナップルとか…。

例4では、接触経験の少ないNSN3と初中級NNSfが沖縄のお土産について話している。NSN3が102で「ちんすこうってゆう砂糖菓子」と言って「砂糖菓子」を挙げ、この「砂糖菓子」が、NNSfに103「砂糖菓子?」と聞き返されている。ここでは、NSN3の102「砂糖菓子」が「トラブル源」で、NNSfの103「砂糖菓子?」が「修復開始要素」である。それに対してNSN3は、104で「砂糖菓子」と102の発話を繰り返すだけで終わっている。NNSfの1秒の沈黙を経て、NSN3は106「あとは、あと

は、思いつかないなあ、あっパイナップルとか…」と新しい話題に転換して、「砂糖菓子」の話を終了させている。NNSfによる105の1秒の沈黙は、トラブル解決の試みの失敗を明示する「修復完了要素」である。

例4の102～105は、「トラブル源」の「砂糖菓子」に関する「自己修復」の発話連鎖であり、NSN3は104で「砂糖菓子」を繰り返していることから、4-2節の①「繰り返し」を用いていることが分かる。しかし、この①「繰り返し」ではNNSfからの明確な理解反応は得られず、NNSfは結局「砂糖菓子」がわからないまま次の話題に移行させられることになる。このように、接触経験の少ないNSの発話連鎖では、「自己修復」の方法が少なく、結局NNSの理解が得られたかどうか確認されないまま話題を転換する場面も見られた。

#### 4-3-4 考察

以上の「自己修復」の発話連鎖から、NSは普段からNNSと接触することによって、発話のトラブルの解決を目指してNNSの日本語能力に応じて、効果的な「自己修復」を身に付けていると考えられる。大平(1999)では、NSとNNSが意味交渉をする際に、NSがNNSに手がかりを与えることがNNSの理解に繋がるとしている。特に、発話のトラブルが多く発生すると思われる対初中級場面では、NSは、NNSに複数の手がかりを与えなければならない場面にしばしば遭遇する。接触経験の多いNSは、初中級NNSに対して多種多様な「自己修復」の方法を複数回用いて、積極的にNNSに手がかりを与えてNNSの理解を得る努力を重ねていることが窺える。一方、接触経験の少ないNSは、初中級NNSの明確な理解反応が得られず、途中で修復を放棄して話題を転換することもあることから、NNSの日本語能力に応じたトラブルの解決に効果的な「自己修復」を身に付けていないと思われる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、接触場面において一般のNSが行う「自己修復」に、NSのNNSとの日常的な接触経験とNNSの日本語能力がどのような影響を及ぼしているか、分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、接触経験の多いNSは、接触経験の少ないNSより「自己修復」の使用回数が多く、特に初中級NNSに対しては多く用いていること、また、「自己修復」の方法が多く、上級NNSには再構成度の高い「自己修復」を、初中級NNSには再構成度の低い「自己修復」を期待度数より多く用いて、相手の日本語能力に合わせた「自己修復」を行っていた。さらに、「自己修復」の発話連鎖を観察したところ、接触経験の多いNSはNNSが理解できるまで多種多様な「自己修復」を複数回行っている様子が窺えた。

一方、接触経験の少ないNSは、接触経験の多いNSより「自己修復」の使用回数も方法も少なく、NNSの日本語能力を考慮せずに「自己修復」を行っている。また、「自己修復」の発話連鎖では、初中級NNSの理解が得られないまま話題を転換する場面も観察された。

以上のことから、NSのNNSとの接触経験は、NNSの日本語能力に応じてNSが行う「自己修復」の使用の柔軟性と有効性に寄与していることが示唆される。接触場面におけるNSのフォリナー・トークは、固定化されたものではなく、会話参加者のNSの日常的な接触経験とNNSの日本語能力によって動的に変わるものであると考えられる。

本稿はNSが行う「自己修復」に注目したが、「自己修復」以外にも、NSの接触経験とNNSの日本語能力が影響を与える可能性が推測される。今後は、接触場面においてNSが行う「他者修復」についても掘り下げて考察したいと考える。

## 引用文献

- (1) 宇佐美 まゆみ (2015) 「基本的な文字化の原則 (BTSJ)」改訂版  
宇佐美まゆみ研究室
- (2) 大平 未央子 (1999) 「接触場面の質問—応答連鎖における日本語母語話者の「言い直し」」『大阪大学留学生センター研究論集  
多文化社会と留学生交流』3, 67–85
- (3) 串田 秀也・平本 毅・林 誠 (2017) 『会話分析入門』, 勁草書房
- (4) 坂本 正・小塚 操・架谷真知子・児崎秋江・稲葉みどり・原田  
知恵子 (1989) 「「日本語のフォリナー・トーク」に対する日本語  
学習者の反応」『日本語教育』69, 121–146
- (5) H. サックス・E. A. シェグロフ・G. ジェファソン (2010) 西阪  
仰 [訳] 「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」  
『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社, 5–153  
(=Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest  
systematics for the organization of turn-taking for conversation.  
*Language*, 50(4) : 696–735.)
- (6) 志村 明彦 (1989) 「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日  
本語教育』, 68, 204–215
- (7) E. A. シェグロフ・G. ジェファソン・H. サックス (2010) 西阪  
仰 [訳] 「会話における修復の組織—自己訂正の優先性」『会  
話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社, 155–  
246 (=Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). The  
preference for self-correction in the organization of repair in  
conversation. *Language*, 53(2) : 361–382.)
- (8) スクータリデス, スリーナ (1981) 「日本語におけるフォリナー・  
トーク (外国人の日本語の実態)」『日本語教育』45, 53–62

- (9) 筒井 千絵 (2008) 「フォリナー・トークの実際：非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違」『一橋大学留学生センター紀要』11, 79-95
- (10) 増井 展子 (2005) 「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化：共生言語学習の視点から」『筑波大学地域研究』25, 1-17
- (11) 柳田 直美 (2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響：母語話者への日本語教育支援を目指して」『日本語教育』145, 13-24
- (12) 雷 雲恵 (2019) 「接触場面における日本語母語話者の「言い直し」について：接触経験と学習者の日本語能力が及ぼす影響に着目して」『2019年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 94-99

